

私の一冊

看護学科 石垣範子 先生

志治美世子著 『ねじれ:医療の光と影を超えて』

小鹿図書館 : 498.12/Sh 32 (集英社)

今年都内の7つの病院で緊急入院の要請を断られ、最後に搬送された B 病院で妊婦が死亡するという痛ましい事件が起こった。

事故直後から、こうした医療事故がなぜ起こってしまったのかについての議論がなされ、舛添厚生労働大臣、石原東京都知事ら、多くの関係者らが、「医師の不足」、「集中治療病床の不足」、「緊急搬送システムの不備」といった医療の構造的な問題がその背景にあるとされたニュースはまだ耳に新しい。

またこの一年を通してみても、「〇〇病院の××診療科が閉鎖された。」「△△病院が休診に追い込まれ、今後の目処が全く立たない。」など、私たちのごく身近で、医療現場崩壊のニュースが後を絶たない。

では、医療事故はこうした医療現場(医療者)だけの問題から生じているものなのであろうか。

本著では、著者が医療者、医療事故の当事者である患者(家族を含む)の双方と向き合い、そこで何が起きたのか、なぜ双方の溝がうまらないのかについて、いくつかの事件や訴訟などの事実をまじえながら書きすすめている。そして、「お互いがもっと素直に相手に近寄り、積極的に相手を理解しようとする、そのような人間同士のコミュニケーションとしてごく自然な医療であることを妨げているものは、いったい何なのだろう。ねじれ、疲弊した関係を復興させる鍵はどこにあるのか？」と問っている。

しかしながら、医療者たちの事情と患者側の事情はかみ合わないばかりか、解決のための糸口が見つからず、ねじれの構造そのままに闇の中となって風化していつている。

果たして、著者の問うねじれ、また現代のような時代背景の中にあって、私たち一人一人が安全でかつ、安心のできる生活や医療の保障が可能になるのだろうか。

誰でもが加害者、被害者にもなりうるということを肝に銘じつつ、いかなる時にも歩み寄れる姿勢、を私自身は保ちたいと思っている。